62-141

佛教解列

宮內廳圖書寮

己亥春冬録書

渥雲生句

孝長

一峯一步支三峰五步

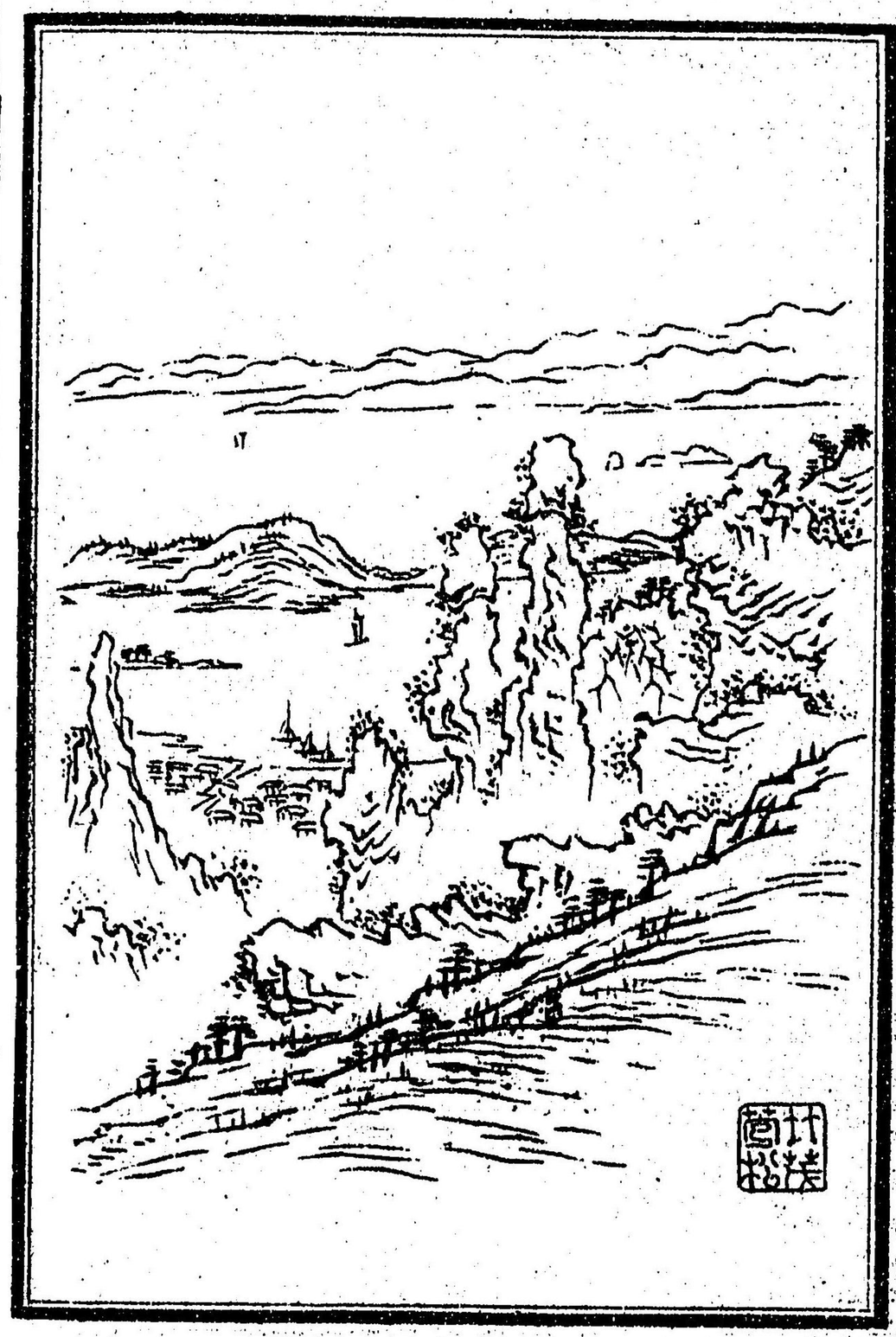
十峯千百山峯迎我並立

且怪空中天滴上戴三峯

庚子新夏於星城山六

孝長人拘題

自四壁
頂眺
內之流
灣
國業
生於
字夏
復
寫于
黃業
白雪
於
苦巖
園



小豆島略圖

縮尺二十万分之一

大坂神戸其他中國地方ヨリ寒霞渓ヲ探ラントスル遊客ノ為メ左ニ汽船航路ノ海里表ヲ示ス須ラク便宜ノ航路ヲ取ルヘキナリ

汽船港海里表

内海湾	坂手港	土庄港	
高松 十六海里	高松 十六海里	高松 十二海里	
岡山 二十四海里	多度津 三十六海里	丸亀 二十一海里	
多度津 三十二海里	尾道 六十七海里	多度津 二十六海里	
赤穂 二十三海里	三ノ濱 百十二海里	岡山 十三海里	
神戸 五十二海里	廣嶋 百十七海里	尾道 五十四海里	
大坂 六十四海里	神戸 四十七海里	神戸 五十八海里	
馬関 二百四十海里	大坂 六十海里	大坂 七十二海里	

寒霞溪道ある處目次

○寒霞溪之沿革
○土の庄港
○太麻山
○龍燈松
○一本松
○西村梅花
○内海灣
○下村港
○楊柳碕
○滑見寺
○西の石門
○鹿背門

○寒霞溪
○十二勝
○芭蕉塚
○星ヶ城
○東の石門
○坂手湊
○兒島の貯魚洲
○隼山
○洞雲山
○碁石山
○飽浦神社
○大部浦
○仙蛭瀧

寒霞溪道ある記

鐸姫嶋　碌々山人編纂

寒霞溪は東讃小豆嶋内の海草壁郷乃艮隅に方りて巖石奇恠秀氣盤礴一歩百景千態萬狀更に加ふるに秋冬の交楓蘿霜に染み錦繡滿山を錯綜し實に天然の大畫圖にして所謂造化乃美術境たり國史を按するに應神天皇二十二年秋九月辛巳朔天皇淡路島に狩して吉備に幸し轉して小豆嶋に遊ひ賜ふと蓋し土人乃口碑に傳ふる所によれと此山に登臨せられしも斷巖屏立殆んと進むへからす鉤を以て樹に懸け崎嶇を陟り賜ひしと云ふ是則ち鉤懸或い神懸乃名乃因て起る所以にして文人騷客其字顏を雅馴ならしとおし神翔若くは神馳の字を題するふ至れり天保二辛卯乃年貫名海屋此地に遊ひ杜步陵乃古典を引て浣花溪

を命し大ひに山岳乃名を揄揚せり左の詩歌と弘化年中再游の際席上
書に題するものなり

石泉風若雨。濆沫灑埃氛。解道山中客。朝昏親白雲。

きりふけふ花のしらゐた葉の錦
神山姫のいとまあらすも

海屋一たび浣花溪を文墨壇上に紹介せしおのかゝ探勝の客年に増し
多くあり柴秋村藤本鉄石等陸續踵を接して至る明治二年己巳の冬成
島柳北黄薇旅行乃途次此山に登り天下乃一大絶勝ありと賞揚せり詩
歌數首あり

絶勝始疑天有私。丹青難寫況文詞。半生憐我烟霞癖。
未識溪山若個奇。

遠近乃紅葉白雲ふみわけて
錦のおかゝ小男鹿れなく

明治十二年己卯の秋余森方城と謀り溪中に草亭を結ひ遊人雨を避け
勞を慰するの所とす當時高松の片山冲堂及ひ二三の吟客鍵懸草堂之
記あり加之柳北仙史鍵懸山移文を草し朝野新聞に掲げて廣く江湖に
告げしより遊覽の雅客更に大ゝ増加せり藤澤南岳亦草堂に扁するに
寒霞溪乃三字を題し而して別に寒霞溪之説を贈れり山田梅村も亦大
に此説ゝ賛す於茲乎大方の詞客多くい此文字を採用して近來に至て
は寒霞溪の字顔文壇を動かすに至れり翌明治庚辰乃秋鎌田玄溪來游
し余と同しく溪山に游ひ其奇拔宏壯あるもの十二景を摸寫し戯れに
題名を署し小詩を附す是則ち寒霞溪十二勝の濫觴なり其他岡本黄石
長三洲江馬天江依田百川日下部鳴鶴等の諸家相前後して至り近時に
在てい清客韓人歐米の漫游家絡繹として渡航し内地游歴人の如きと
恒に足跡の絶ゆることなし昨明治戊戌の春より大方博雅諸士の賛助
を得て新さに保勝會なるものを創設し溪山を萬世不變の勝地となし
千秋の風致を維持し更に大に蹊路を拓き亭榭を構へ一段の光景を點
綴して以て中外乃遊覽者を待遇することゝいなしぬ仍て爰に寒霞溪

道之るゑの荒さしをものして登山の便りとおす蓋し大阪神戸中國九州の諸港より小豆島に寄航し寒霞溪の奇勝を探らんとするには四航路あり土之庄港内海灣坂手港大部浦是なり今各別に詳記せんとす又此四ゐ所より寒霞溪の麓に達する道すがら多少の名勝古蹟あることを記臆すべし併せ記して東道の便りとはなさむ

○土之庄港

寒霞溪麓草壁村大字下村まで三里二十六丁

土之庄と小豆島の西部に方りて半島をなし永代橋を以て本島と聯絡せり郡役所あり警察署あり郵便電信局區裁判所銀行其他旅亭人力車組合會等も備はり商業盛にして本嶋第一の繁華地たり漁船問屋と同地の西端吉ヶ浦と云ふ所にありて商船會社の漁船定期の航海をなせり此港に到着したる旅客は直ちに上陸して縣道を東に行けと先つ左側に蜘々として蒼穹ゐ聳えたる紡績場を見るべし凡ろ六七丁にして土之庄町に入り郵便電信局の角を左折して北に向ひ永代橋を渡り塩田の中道を馳て赤穂屋と云ふ所に出るなり

淵崎港にも近來尼崎漁船の寄航すること〻あれり此港に到着したる旅客も亦同地の中の町を一直線ゐ東して同しく赤穂屋に達し傳法川に架したる八幡橋を渡り數丁の郊路を斜めに東して八幡峠ゐあ〻るあり右手にハ本島五社の一ある龜丘八幡社あ𪜈路傍にハ老松參差として風致殊ゐ佳なり坂路を降れと入部と云ふ濱邊ゐ達し左側にハ白砂青松の間數戸の漁家網を洒し西南の眺望絶倫と云ふべし遠きハ屋嶋五剣山雌雄兩嶋乃至玉藻城の浦々近きハ土之庄沖の四嶋阿津枳嶋二見岩などの波間に羅列して漁舟席帆を揚けて東西ゐ浮游するを見るべし入部を過て蒲生と云へる村落に至れと東北ゐ當り突兀として雲間に聳えたる山嶽乃古刹を擁するあり斯は乃ち太麻山とて俗に西の瀧觀音と稱する眺望絶佳の勝地あり遊客宜しく登臨して一望すべきあり則ち蒲生街道の中程ゐ至れと瀧水寺道と記せる石標あ𪜈此所より左に折れて急立せる峻坂を攀ること十八丁ゐ〻て達もべし

太麻山

西の瀧觀音と唱へ小豆島巡拜第四十二番乃靈場あり境内より登り二王門を過て石磴を攀ぢ進めと鐘樓あり建治年中の鑄造ありと云ふ北すること數歩にして仰視すれと扇面狀の碑あり芭蕉翁れ俳句を鐫めり

此ところ眼より見ゆるもの

皆すゝし

瀧水精舍の前庭を徐行して背後なる石壇を登り岩窟乃奥に鎮座ましませる大悲閣より參拜すれと斷巖絶壁恰も人を攫まんとするれ勢あり其嵩容所謂畫家乃骷髏皴あるものゝ似たり石壇乃左側洞窟乃底より奔泉飛濺せり虹の瀧と名く其長さ凡そ二丈にして其幅甚よ廣からをと雖も四時水乃渴する事あし靈泉と謂ふべし

寒月乃巖より凄〻瀧乃音

頌水

音深し澗れぬ清水乃嵩間より

可大

とゝしりも靈乃種や瀧れもと

島岬

前庭ゆい許多乃櫻樹を植えあり艶陽三月花咲ふ乃頃と眼界みゆ雪れ如く霞の如くして遊覽乃人いと多し

花あれと寺ある麓〳〵の聚

芹舍

さて太麻山と曾より瀧あり花あるを愛づるのみゆらも眺望に於てと實より本島不二れ勝境にして西讃の琴彈山乃遠矚と伯仲の間よあり蓋し山嶺れ高きと眼界の遙かゆると以て考ふれと彼の境に勝るとも劣るところはあるまじきなり則ち五劍山屋島れ浦々と高松城い眼下ゆ遥り東南にと阿淡の遙嶺西北にい備作れ遠峰ありて當面一直線より双眸に映するものい雌雄兩島大槌小槌直島壇鉢れ嶋嶼乃至

伊豫藝州の碧螺よして烟波萬里雲耶山耶の間に白帆出沒し漁船い西に奔り東ゑ馳て漁舟釣艇と此所彼処に恰も木の葉を撒したるか如く夕陽將に西山ゑ春かんとする頃にい金波千里を射て其風光時齋も及ぶべきにあらぜ

瀧水寺を辞し去らんにい前路を辿て蒲生に降るも可あり然れとも寒霞溪ゑ遊とんとする者は池田路を唱へ平木と云ふ所へ下ると便利ありとす

龍燈松

此松と瀧水寺境内を辞し二王門を出で左折して池田路よのゝる左手にあり老根蟠屈して翠蓋鬱蒼たり毎年大晦日にい志度浦より龍燈此松よ飛來つて當山へ挿ぐと云ふ

却て說く蒲生道より太麻山へ登らずして直ちに寒霞溪へ往かんには前に述し蒲生の中街道を東に向つて行き半坂と云へる五六丁の阪路を越て池田道に出るあり此邊にて先づ眼眸ゑ映するもの乃ち五劍山以南の遙巒嶋嶼にして近きい三都乃長者が鼻より室生乃天女洲等あり濱邊よい馬場れ松林鉢伏山あり其絶頂には喬松參差として須佐見紀伊守基世の城址あり長勝寺龜山八幡宮と其東方鬱林森々たる中に屹立せり

偖て太麻山より直ちに池田路に降りたる人も此平木と云ふ所にて縣道に會し漸次東位に進み大池の堤にて背路を回顧すれと瀧水寺は既に巳ゑ翠雲淡霞の中に罩れり是より坂路を登り足趾漸く上ゑ向ひて室生峠と稱する難所に掛るあり但し數年前までい林樾翳如たる幽邃乃險阪ありしも今と乃ち平易ある車道ととありぬ往くこと凡ろ二十丁にして内の海乃竹生と云ふところに達す

一本松

數百年を經たる老龍にして幹圍殆んと二丈高さ凡ろ二十間枝葉乃蜒蔓したる敷地凡ろ一反歩なり其下に一祠あり一本松神社と云ふ其側に茶店あり一憩して松風に汗を晒すべし

穏に旭のさす松や初のすみ　　壽愷

竹生を過ぎて水木といへる海岸に出で御着橋を渡りて灣中に斗出したる鬼ヶ崎と名くる所に暫く笻を植てゝ内の海乃光景を眺望すれと最も絶倫あり右手ゟハ先づ阿津枳富士乃屹然として碧空に聳ゑたるを見るべく其南方ゟハ白濱釋迦の鼻乃海角に突出したるあり當面にハ田の浦櫓現岬乃灣口を封せんとするあり左顧すれハ天女島の二洲恰も一偶乃鴛鴦泉水中に浮游するものゟ似たり其東に方り天寄ゟ聳出して奇絶快絶ある連峰を隼山洞雲山非石山とす稍や北位に當り其山ゟ對峙して一峰孤立し碧空を指示するゑ如きも乃を橘の拇指嶽と云ふ最も奇恠の一峰あり星ヶ城寒霞溪は尚ほ其左方雲煙の中ゟ蒼茫たり鬼ヶ崎を經て日方と云ふ村落ゟ至れと梅樹殊ゟ夥し

西村梅花

内の海十二景乃一ゟして西村の長さ凡ろ一里各部落みゑ梅樹あり其中日方を最も多しとす彼乃春風ゟ魁しつる頃と一帯の香世界をゑし田園隠畝みゑ白雪ゑからさるハなし而して安養寺畔最も壯觀ゟして實ゟ此境れ一目千本たり

梅林幾處路彎環。十里香風擁海灣。誰識一拳孤島裏。人間別有小孤山。

いつ乃間ゟ宿屋も出來て島の梅　　碩水

日方を過き去りて清水といへる海岸ゟ至れと又一巨松れ海邊ゟ蟠屈するあ乎其傍らゟ一二の茅屋櫓を並べ風致幽雅ゟして眞に一幅の活畫ゑ乎是より松山の麓を通り艸壁れ下村ゟ至り中の町を往く三四丁ゟして左折し寒霞溪新車道ゟ入るべし

○内海灣　下村港より寒霞溪紅雲亭まで凡ろ三十丁

内の海と本島第一の大灣なり東南は田の浦の權現岬をもつて限られ西南と三都の釋迦の鼻即ち白濱とて阿波乃鳴門より渦まき來れるいと劇しき潮流の衝點地たる岬角にして其間を灣口とおし長徑殆んと二里橫徑凡そ一里にして其狀恰も左右翼を張りさるが如く潮水と抱擁し背後と峰巒連亘し先づ双眸に映するものは鋸山星ケ城寒霞溪等の峰々あり灣内水深くして軍艦商船乃碇泊するもれ絶ゆることなし舊記を案するに往昔天武天皇第一の皇子草壁王の此郷を御名代地と定め給ひしことあり今の草壁と呼べる村名い此に基くおゆ古歌ゆ云へらく

内海乃入江れ浪も御名代の
　　むかし繁しみ立歸るらし

明治二十三年四月十八日呉佐世保の軍港及ひ江田島海軍兵學校へ行幸の際長くも　天皇陛下當灣に御寄泊遊ばされしかと嶋民は萬歳を唱へて歡迎し奉れり翌十九日御發艦遊ばされしも折あしく大霧濛々

として御行先さへ見えずなりけれと御製あり

思ひきや石つきの去まれ朝きりに
　　ゆくさたみゐすなりとてひとは

斯くて霧は終日霽れず同夜は灣口に御碇泊あらせられ漸やく廿日午前九時二十分に至り龍艦悉く翠波渺茫の中に進行せられき其後赤くも　陛下より御眞影を下し給ひしを以て島民れ喜び勇ふるにものなく直に拜戴式を擧行し夫れより四月十八日を以て御寄泊紀念日と定め年々内海八幡神社の社内に於て盛大なる式典を擧やるに至れり鉉ゆ苗羽村の有志は紀念音樂隊なるものを組織し毎歳の式典に劇唄たる音樂を以て式場の盛事を助け尊嚴を增さしひるなど實に本郡の美事にして又地方にとりての一名物と謂ふべし

時に明治三十二年己亥秋十月二十三日午后四時とも覺しき頃此道ゑるべの原稿を艸しつゝありしに城の如き巨大なる軍艦三隻流笛をも

鳴らさず靡々として灣内に入り來れりはのかに承る所によれと
皇太子殿下呉鎮守府へ御微行の趣きにて御召艦は高砂號御衛艦は明
石號及び水雷驅逐艇數隻にてありし暫時にして殿下にハ御上陸遊
とされ隨從武官と共に寒霞溪乃麓にて御遊艇あらせられしも時既に
晩景に際したるを以て少焉にして御歸艦あらせられたり夜來内海灣
頭幾百千乃球燈を照らして萬歳を祝し奉れり翌二十四日午前七時御
發艦乃際人民より寒霞溪眞景畫平素麺醤油鯛等を獻上し御艦ハ早く
既に雲烟の中に遁御あらせられたり抑も往昔　應神天皇寒霞溪へ御
遊覽あらせられし以來二千五百年乃后東宮殿下乃行幸あらせられし
と寒霞溪乃歴史に於て特書すべきことあり

○下村港

下村港と内の海流船の定繋所にして草壁村に屬し東部第一乃繁榮地
たり乃ち内海郷の咽喉を扼し商業乃要地にして諸國の買船商船入出
乃絶ゆることなし小蒸流船ハ毎日土之庄高松岡山等に航海して頗る
便利あり流船問屋ハ阜頭の近傍にありて寒霞溪遊覽の旅客多くハ此
地に輻輳し旅亭酒舗等最も多く寒霞溪土產品あきを販賣する雜店も
あり仍て此地に休泊せんとする遊客と港口より直ちに街道と東行し
て楊柳待と云へる石橋を渡り東橋庵魚蒸桝屋等乃旅舍に投すべし此
楊柳待ハ内海十二景の一にして夏の夕納涼するおよろし往年と楊柳
多かりしも今と少なし成嶋柳北曾て此橋を過きて詩あり

綺樓惰夢斷。千里故山遙。孤島無相識。追雲渡柳橋。

柳北仙史

下村より寒霞溪に登るハ今回改修したる新車道あり山麓まで平坦
にして腕車を通すべし土之庄より來る文人も坂手より到る墨客もみ
な此車道を經て寒霞溪道に入るを順序とす
遊客若し此道を辿らば秀氣盤礴さる寒霞溪と當前に屹立し巍峨たる
星ヶ城は中天に聳ゑ左顧すれと石門鞍懸等乃絶景あり遥か右手には
碧空を指す拇指峯ありて彼に此に奇山聯綿として共に手を擧げ招く

が如く迎ふるが如し又路傍にて清見寺とて境内最も廣濶なる精舍あり天平年間行基の開山せしもの乃にして此錦樓より内海を眺望すれい風光絶佳にして其寺號に背かざるを知るべし

雲影翻幡影。潮音和梵音。有人能說法。當遇老龍尊。

辛卯之冬日題内海清見寺　海屋生

清見寺の西傍を一直線に進まば上村にして別當川に新たに架したる神驛橋あり橋上より溪山を遠望すれい一帶の白雲靉靆として峰巒に靉ひ若し錦期に會すれと錦繡燦爛として吟眸を刺衝し神馳せ魂將に飛んとす橋を過ぎて稍や行かば路傍に寒霞溪土產品を販ぐ二三の雜店あり又道傍内の招牌を下せし家あり尙は往くこと數丁にして寒霞溪の麓に至り別當川乃上流に沿ひ妙見山乃麓を西北に向て登るべし

寒霞溪乃絶景のみを遊覽せむとあれば前記の道を行かば最も便利なりとす然れども茲に一覽の價すべき石門の奇勝あり依て操觚者流のために夫れが東道の荒さしを述ぶべし

乃ち寒霞溪の麓なる車道より妙見山天津神社乃境内に入る土橋を左りに渡り舞臺の前に出て石階を登らず二三間南に歩し更に右折して書尙は暗き妙見山の鬱蒼たる森林中を横ぎり天津神社乃裏路なる後山と字する所に出で夫れより窟路と稱する險惡なる石逕を西乃方面に向て躋らば其行程新車道より凡り三十丁にして達すべし但し此路と地理をしらざる人は頗る迷ひ易きを以て嚮導者を携ふるを良しとす

西石門石門歸橋

石門は高さ凡り五丈廣さ三丈餘にして上村より中山と云ふ所へ越る關門ありしも今は新路と唱ふる捷徑を通りて樵夫の外は此門を過るもの乃なし俗に之を窓と稱し又星ヶ城路に東の石門あるを以て西の石門とも云ふ巨巖は門の形を成して苔滑かに塵埃をず其奇態なること文にも畫にも盡せざる所にして神工鬼斧ともいふべきか

加ふるに鶯笹は生ひ茂りて間々紅葉をあしらひ名も知らぬ鳥は樹に馴れて面白く語り馬追ふ賤の女柴苅る童この下をくゞる蔭の妙なる眺に仙境とはおれあるべし門を過ぎて上手より廻れば内海灣い泉水は觀をなして穏波扁帆を浮べ神女島は翠を凝らして繪の如く此所に炊烟あれば彼所より白雲靡びき其間に振手の峯山洞雲山等は眼下に起伏し遙かに阿波の鳴門淡路の峯巒を雲烟萬重の中に髣髴として望まゞ實に雄大一幅の活畫たり世の人一度は見ざる可らず

石梁千尺勢如呑。跳歩危磴易斷魂。回顧乍驚眺望變。
鬱雲低處是鳴門。

岩かけふよい風ありて夏木立　　衣笠豪谷

石窟や紅葉の雨の逃けところ　　子朔

節水

石門の小徑を少しく登り北の溪を見渡せば嚴壑奇怪にして猿公の住めるが如き洞穴許多あり紅樹もいと多く寒霞溪よりも勝れる程の觀はしさあり絶頂に上れば則ち鞍嶺と云ふ所にして其高さ四百五十一間絶壁にて雜樹なく一面の草原あり是より北乃方寒霞溪の嶺たる四望頂までハ五十丁餘もあれば日脚の都合に依りもと來りし道を下り石門をくゞりて麓なる本道に出づべし

寒霞溪へ登るにハ妙見山の麓を往くあと一丁許りにして遊仙橋ふ達すべし此橋は凡俗相隔たる境界にして之を渡れバ精神爽快として何となく登仙するの心地あり此河邊は苔石磊砢として其水清く奔流常に石を嚙みて珠玉迸り潭水の貯溜する所さゆがら紺靛に染めたらんが如し此所を過ぐれば阪路羊腸蛾と西し蛾い北し往くこと凡そ七八丁にして鹿門に達すべし

鹿砦門

秦皇萬里の長城の如く山林と田圃との境に石塔を築きて本洲を一

環し其長さ凡そ四十余里なり路に當りをの〳〵門を設けわりしも今は其門柝ちてなく唯石墻のみ歴然として存せり此墻もと天明年間上村の里正に村上彦三郎なるものあり猪鹿の田圃を害するを憂へ住民と謀りて率先此工を起し遂に本島を一周するに及へりと云ふ一孤嶋にして往昔斯くまでの大工事を遂けしは皇國いつれの地にも稀なるべく今に本洲の一名物として稱せらる

鹿門乃路傍にある岩石の上に一憩すれば内海乃見晴し最も美しく彼の神女島は瑠璃一碧乃海中に影を止めて眠り漁舟白帆は其間を來往し濱邊には蜑舍漁屋のうちこちに散點するあり遠くと阿嶺乃青螺淡烟乃中に出沒するなど遠近の風光詩趣ならざるはあく蕎題ならざるいあし時に林岳を隔て丸に聲あり

磯碕梯田殺々平。斷連鹿砦曲如城。不知獵手果何號。

一爆隔峯丸有聲。

山田梅村

鹿砦を過ぎて林間に入れど道殊に清涼にして老松雜木千枝萬葉神氣頓に澄みて唯遠く微かに溪流乃潺々たるを聞のみ落葉蕭々たる間を蹈分けつゝ往くこと七八丁にして左側に湧泉あり淨水掬すべく依田百川の渴飲湧と名けしは是なり此所を過ぐれば道愈よ峻阪となり遂て横斜曲折溪流を渉りなぞして行く程に路傍の巖は骨を露はし右仰せば巨巖聳立し噴火石は畫家の所謂骷髏皴を描きしにさも似たり尙二三丁を躋れば左に當り寒霞溪十二勝の第一景双畔の中に入る

通天窓 其一

秀峰巍然半天に聳ゑて巖角斧劈の痕を露はし其南端の中腹に當り衝然たる一個の圓窓を穿ち碧翁以て呼吸を通ずべく鱣伯以て紫雲を呑吐すべし如何に無風流の人も足一たび此堺に入れば半ば仙界に上るの感必ず湧出つへく尙登ること數十歩にして絲鈔瀾の畔に達すべし

石竅通呼吸。洒然心始降。誰言仙路杳。咫尺是天窓。

絲麺澗

玄溪居士

透徹玉の如き溪流は扁平一連乃石にて成れる河床に溉ぎ萬條乃纖流恰も銀麺を流したるが如く古老の説によれば上流に索麺を流し下流にて之を啜り其味の奇を賞せしと云ふされば土人此處を呼て索麺流しと稱するも面白し兎にも角にも清流に觴杯を流し曲水の宴を開けは又一興あるべし四時水乃涸ることなく春秋の候い殳玉の響き殊に高し霜期には紅葉溺流に映じげにや雲錦を畫くに似たり

溪澗常懸秋練長。土宜並比美名揚。銀絲瀉下三千縷。
流入詩腸恣意香。

三舟漁夫

寒泉乱石間。映帶烟嵐紫。欲聽玉琤々。下流先洗耳。

松亭隠士

紅雲亭 其二

蘿谷隙人

草亭何用壁。萬景宜秋望。不道霜寒遲。紅雲圍作幔。

鈴澗三丈乃溪流中に架したる一傘亭なり風致遒雅にして曲澗蹙るべく四邊みな幽邃の限りを極め怪巖奇峯山又山に連りて春は谷間の山櫻夏は茂樹の深みぞり秋は織りなす唐錦冬は玉あす樹々の雪四時の風光何一つ欠くるものとて非されを潮山神々として世の塵と断ちここに至つて何人も神仙の郷にあるの思ひあらしめ遊客の多くは此亭に行厨を弄す

此亭より北に向て躋れを二徑あり右折して往くこと二三十歩にして稻や平易ある石逕に到り左顧すれば

錦屏風 其三

鉄鏹の如き絶壁斗折して溪流其麓をめぐり恰も一幅の横卷を展觀するに似たり秋も半ばを過ぎなば巖に纏へる蔦羅思ひ〳〵に紅葉

し錦綺絢爛として其美麗云はんかたなく大李將軍乃粉本にあらざれど則ち抱一上人の彩色あるかと疑はれ巨巖斷壁は大字を題するが如く或は鎗劍石築を架するが如く又い數峰合して一峯とあり一峰分れて數峯とあるあり峯上無數乃峯を戴き崩んと欲して崩れず頽れて一峰の頭に墮るおど實に千態萬狀筆墨のよく盡す所にあらず斯くて秋去り北風烈しき比ともあらば嶺松翠の調べをなして宛から天女の舞樂の如く飄々たる白雪は樹々の梢に宿り時にもあらぬ花を着け觀る人畫圖の中ある心地せん

隔溪錦嶂似屏横。鬼斧何年鑿削成。拈取尖峯當斗筆。
摩崖石上漫題名。

清客　王　泰　園

峽を過ぎ一丁許にして左折し小溪あり矼を渉て仰視すれば奇巖撹立して峭削空に登る高低錯落殆んと筆架に似たる尖峰あり王泰園乃所謂筆架峰と名けしも乃是あり

老杉洞　其四

巨杉蔚々蒼々たる間に巖壁腹を破つて一洞穴を形れり青嵐吹き滿て陰寒晦昧山鬼木魅乃家にあらざれど則ち神仙の住みし所なるかと疑はれ風光幽邃その限りを極めて蒼の晴るあれば繡眼兒の鳴くあり四十雀の群れるあり其他種々の小鳥飛翔するありて其奇觀形容するに辞なし

仙寰欲不違。空洞隔雲巖。恍惚鑾簫響。天風吹老檜。

鳴鈴仙史

蟾蜍巖　其五

莖を去て細流を東方に渡り石逕を辿る數十歩にして

居然大腹似蟾蜍。一見始知名不虛。嘯々疑他相喚去。
斷梅時節放晴初。

紅　雪　來

左側の巖容みな宮ならざる中に蟾蜍の踞躍するが如き態をなして

一圓月を呑ひ乃勢あり此邊楓樹雜木其間に點綴し加ふるに蘭の幽香石斛の微薫ありていとゆかしく路代右側にも亦蟠蜿に類する惟巖あり仍て土人左あるを雄とし右あるを雌と呼べり此處より稍や險阪を攀ぢて丘頭に佇立し南望すれど

玉筍峰 其六

奇峰屹として天を摩て宛然玉龍の躍るか如く其狀又一大竹筍に似たり見る人みな偉觀に心を奪はれて險路の勞をも打ち忘れ讃れかつ驚び魂消ねさらんや學海居士曰く金洞乃天燭峯酷た此に肖たりと清客玉治本と西湖乃雷峰塔に彷彿たりと云ふ

解纜玉筍欲拂雲。尖頭挺々不成群。試從高處下評品。
第一冲天是此君。

東海道人

爰を過ぎつて少しく西に行かば又細流あり清冷渇を醫するに足る二三の矼を渉り登ること十歩許にして路の左側に一異石あり名れ

畫帖石 其七

其形ち書畫帖を疊むか如く傾きて而して危からす其舊數人を坐すべし落葉を燒て酒を燗むるによく又山中急雨を避くるにもよし此境雜木生ひ茂り撫子尾花女郎花野菊なぞそちこちに艶を競ひ風致云ふべからす

仙客作大帖。殷之幽澗篠。此中何所畫。俗士不能拔。

椋園老癡

なほ行くこと一丁餘にして少しく峻坂を上り巖腹の稍や坦易なる所にて東方を眺み儼然高く視感に映ずるものは

層雲壇 其八

物の如く壘の如く城廓の如くにして四邊芝生閑じこめ氣爽やかに風清く疊石層々諧研相接するなぞ褒叉の牙を張るに似たり此偉觀もと空層洞と稱せしものにして恒に雲烟を吐呑し洞底時に山猿の遊戯するを見る又其上側に石筍數株ありて何となう閑雅寂寞人を

して神氣洪然の感あらしむ然り古來詩人文士の其美を歌はんとして彷徨去り能はざるもの幾許ぞ

倚天空洞幾層々。羽客幽棲呼欲聽。我醉踏雲將換骨。白雲宛似老龍騰。

荷葉岳 其九

檜丘仙兒

溪の西を仰げば一巨壁は畫幅を展べたるが如く巖面縱横に龜裂して歴々荷葉皺を描き出し名も知らぬ萬羅むちゃちに纏ひ四時配色の妙を示し殊に霜葉ハ二月の花にも勝り其美五代餐丘の遺墨にもらされば則ち第五隆翁乃模本あるかと思はる

縱嶽最奇々絶倫。白雲淡抹碧嶙峋。天公授我畫山訣。特地寫來荷葉皺。

帽子石 其十

晋香居士

荷葉岳乃前にて少しく上方にあたり幽谷の底より碧空に突出する二石筍あり其高さ十數丈上なるもの高く下なるもの稍や低し尖頭更に巖を纏きて今にも落ち來らんかと危ふまれ矮樹點々寄生し髣髴となり釋となりて恰も人の帽を被て並ひ行くが如くされど人此狀を呼んで富人僚屬を隨伴して天に朝するに似たりと云ひ或ハ寒山拾得二佛歴劫の身おるべしとも云へり其奇なること文にも畫にも盡せざるところにして何人か此に至つて宇宙の玄妙に一驚を吃せざる者あらん

何物拋烏帽。飛來掛峭頭。溪山風雨夜。恐有老猿偷。

礫々山人

女蘿壁 其十一

數種の萬羅阻壁に纏繞して綠苔其間を綴り四時青々たり十月の春他の巖樹霜風に染み滿山みな華衣裝飾して其美艶陽の花よりも紅なるに特り女蘿壁のみ翠巖依然として貞操色を移さず眺望一入の

趣きあり

靜物爲衣雲作裳。青山自具美人相。嫣然亦立烟霞際。

假學徐妃半面粧。

竹香道人

既に過ぎりし所の地一度び首を回らさゞ奇巖怪石楓樹雜木眼前に横はり見る人其觀を異にして新奮の送迎に暇なからしむ漸やくにして女蘿壁の下に到れば此處に二徑あり左あるを馬路と稱して稍や平易あれども迂遠にして名の如く馬駄を通じ右あるを古來鉤蹶路と稱し極めて難路なるも捷徑あり遊客の多くは右折して此徑を登るべし猿攀魚貫愈よ昇れば愈よ險を進めば益も峻實に後者は前者の踵を背め手を以て足に代へ一趾は一趾より崎嶇にして一夫萬夫を顧ぐべき痛嶮あり喘ぎ〳〵巖に縋つて登り盡くせば雄壯なる別天地たり

四望頂 其十二

平原數里曠野の如く青艸茵茵を敷き四邊の眺望佳絶にして少しく南に巖角あり坐禪臺と云ふ此處眺觀最も快豁にして遠きは阿讃の山巒雲烟渺茫の間に濃淡其趣きを異らし備水播山亦蜿蜒波瀾の狀をなして東北に搖曳し滊船烟を吐いて西に航すれば白帆風を孕みて東に往き近くは內海灣の波光夕陽に映じ悠々閑々釣を垂るとの漁舟一々指點すべく伏して來路を下瞰せば群巒奇峯高低鋸齒の狀をなして兒孫乃膝下に跪づくに似たりそれ鴻雁一聲白露方に至れば山神靑羅を脫して潺湲錦衣に盛裝し送りて語らんとすれば迎へて笑はんとす於茲乎山海の奇勝偉觀其精粹を極めて宛がら雄大幾千の壯觀を備ふる「パノラマ」の中に在るが如く神思恍惚として身は當に羽化せんとするの思ひあるべし

芭蕉塚

四望頂に登て先づ眼に觸るゝものは天然の巨石に道嶮を鏤みさる蕉翁の碑あり天保年間の建立にかゝりて俳客可大乃筆になる碑畔一面に芝生にして片塵飛ぶを許さず清淨拭ふが如く行厨を弄するにより

初し久れ嶽も小霧をはし氣なり　益

山出沒兮雲往來。瞬間變幻亦奇哉。我登仙嶺最高處。長嘯一聲飛酒盃。　壘上漁史

雲掃老腳杖雖支。鬼斧神工驚且疑。可惜賴翁無眼福。畢生只說馬溪奇。　天江查客

柴子曾游此。歸來壺說奇。至今過卅歲。始得踐前期。樹老蒼虬瘦。峯尖玉筍危。雲歸可磨處。疑有昔題詩。　三洲居士

何物曾鑱石。驚來闢此寰。衆峰不受土。群玉壘成山。幽壁開空洞。碧溪鳴佩環。神思忽縹緲。直欲叩關仙。　靜齋居士

呼爲小豆始從誰。島上來探最大奇。三十六灘一顧盼。何知眞界濶如斯。　鹿門道人

極穿瘦嶂惟巖斜。仰看高懸紅勝花。雨々三々訪秋客。嗒然日一溪蛙。　南岳隱士

天風襲袖欲生羽。下視茫々思小魯。果信蓬瀛杯水如。最高極處脫鳴戶。　梅村逸士

古皇遺蹟號鉤繩。壘嶂千年領紫烟。成嶺成峰橫又側。似屏似塔斷還連。溪厓重復疑無路。巖洞中通可見天。絕頂遙瞻渾不隔。滄洋談海落當前。　濟客王泰國

四望頂上一高臺。萬里游筇今日來。仰接蒼穹摩列宿。俯看碧海絕纖埃。題壁名在古皇蹟。壘嶂影斜詩客盃。收拾眼前十二景。乘風直欲涉蓬萊。　韓人李瑞在

已讀雲在書。又聞星岳說。鬼削與神劃。無不驚奇絕。所恨東歸期方遲。登攀應約紅葉節。　一六居士

綾の海つらゝくまはの影さゑて
かゞうけやまそ紅葉しにける　鄭守

山姫の鹿子まだらに綾りろめし
秋のこゝろを誰に語らひ　やと

風寒き霰の溪乃木ゝ間より
春來にけりと鶯のあく　浮一

くらへてと嵐小倉も何あらす
此神うけの嶽乃紅葉と　正曾

秋深き山こしみうをし幾ろ度
かへり見すれといや愛しき　眞臣

岩か根をつゝひあまりて谷川の
橋にもかゝる蔦紅葉うな　惟直

吹あたる岩に雲ちるもみちかな　可大

岩組やうれからそをに蔦もみち　碩水

影きよく水乃あかれて澤もみち　養父

見まかふや巖巖重のつゝさもみち　堅六

眺放しもあらぬ詠めや若もみち　梅晴

寒き日もかすむ溪間や水乃おと　北叟

星ヶ城

四望頂より東北に躍ること凡二十丁にして星ヶ城に達すべし此處
艸原茫々として絶て雜樹なく勇を鼓して木嶋第一の高嶺に上らば

其海抜四百五十五間にして乾坤寥廓一物の眼界を遮るものとてはなく總て四圍海を還らし南は阿淡議の翠嶺遠く連り北は遙かに播磨の青螺を望み其他近州米點の山みな水を隔て寸眸の中に集り今や寒霞溪の秀峯も脚下茵底に盤礴として起伏偃蹇するを眺め萬景いと快濶なりければ天地落眉間と叔是水翁が吟せられし風色も斯くやと思ひ出でゝは何人か腕を拱かざるものあらん

星ヶ城と八邑に跨り中古は二十七ヶ村の共有野山にして暦應三年佐々木三郎左衛門尉飽浦信胤乃城廓を搆へし古址あり此事跡に就ては神懸保勝會特別會員たる新田靜灣のものせる小説星ヶ城に詳かなれば爰に之を記すに代へて大平記の此事に關する一小節を轉載すべし

斯くる所に伊豫國より專使馳せ來りて急き可然大將を一人撰ひて下されなど御方に對し忠戰を可致乃由を奏聞したりしかど脇屋刑部卿義助朝臣を下さるへきに公議定りけりされども下向の道海上も皆敵陣なり如何して下向すべきと詮議一ならさりける処に備前國の住人佐々木飽浦三郎左衛門尉信胤早馬を打て去月二十三日小豆島に押し渡り義兵を擧くる処に國中の志ある輩馳せ加りて逆徒少々打順へ京都運送乃船路を差塞きて候なり急き近日大將御下向あるべしとぞ告けたりける諸卿是を聞て大將進發乃道開けて天運機を得たる時至りぬと悦び給ふ事限りなし云々

不辭忍死寃崔嵬。杜宇聲中返照開。莫上星城高処望。故山一々眼中來。

竹香道人

雲舳千重又萬重。紅楓如錦映青松。他年栖息斯鄉好。笑指星城第一峯。

墨上漁史

義旗長霧峯勢雄。稜々劍氣冲蒼穹。千年熱血孤臣淚。化作寒山万樹楓。

羅木生

さもうにし人のみさをの偲されて
仰けとくもる星の城山　星城

鶴のはしかけとよせ星か城　異湯

秋暮るゝ鶴もとゝまかす星う峰　在水

星ヶ城より下向するには元と來し寒霞溪路に出るも可なり大部路をとりて北浦に歸るもよし又土人の城路と唱ふる寒霞溪の東の麓路を經て上村に降るも良く人々其便利に任すべきも本道は此城路にして文人雅客一日の登山大抵寒霞溪に時を奪はれて此處を觀るもの少なきにより其名著しく顯はれざるも次第〳〵に下り行くほどに宏壯奇拔の峯巒いと多く就中星ヶ城を降る三合目の左溪に方り殊に鬼殿神工の一奇勝ありこれぞ則ち

東石門

其大さ西の石門に比すれバ稍や小なれとも怪巖累々門をなして洞底潺々たる溪流あり岩檜葉、一ッ葉、春蘭、石斛、忍草あゞ寄生して涼風颯々酷暑おゞ夢にだも知れず楓樹雜木奇巖の配置最も妙を極め老鶯微かに幽谷の底に囀ずれば山猿時にあちこちに逍遙し又稀には危巖に猿橋の演技を見ることありて其趣味何とも云ふべからず長三洲甚だ之を賞揚し依田學海も亦例の小品をものせり

自山巔而下。徑路頗易。往不百歩。忽見一大石門。扳起蜒下。高十餘丈。幅三丈餘。其衡左右隆起如肉角。然與金洞第一石門。似大過之。門內絕壁。不能下爲憾。依瞰測底。清泉激石。其聲淙然。

學海居士

石門を過て下り行けは東の溪に奇景尙多し霜深き頃は燦爛たる錦繡の底をくゞり溪流飛矼を涉りなゞして上村乃新車道に出つべし

○坂手湊　寒霞溪の麓（上村）まで凡そ五十丁

坂手湊は本島の東南端にして西南に向ひし一好灣なり常に商船軍艦の寄泊すること多くまた晩春のころは釣舟漁艇夥しく櫓聲絶ゆることなし明治三十一年より尼崎汽船の寄港するありて日々馬關より中國大阪神戸間の交通をひらき寒霞溪遊覽人の爲めにも又大に便利なり灣の南方に一孤嶋あり兒嶋と稱し辨財天を鎮せり島上磯馴松は高く低くあちこちに散點し海面一碧玻璃の如く風潔うして世の塵を斷ち實に海山一目の絶景なり一遊して船暇を解するもよし近來此嶋の傍らに貯魚洲を築き鯛鰤鰮鰈鰯尾魚時魚等四季の雜魚潑溂として浮泳せば遊客の意に任せて或は網し或い釣を垂るゝも又一興ならん縣道は濱邊を沿ふて坂手村の東端に達せり其中央に久留島汽船扱店旅舍烹店等あり何れも清潔にして丁寧なり此地より寒霞溪に往んには濱邊乃車道を西に向て一の坂路を越ゆ古江芦の浦の上手を通り内海灣の景光を眺めつゝ苗羽村の縣道に入べし

坂手村の背後には有名なる坂手觀音毘沙門碁石ヶ瀧等の勝區あり茲に東道の荒ましをものしをけば寒霞溪へ往還する時間の都合により參詣して其景を探るもよし則ち濱邊の中央に坂手觀音道と記したる石票あり此所より山手の方へ折れて人家の間を東北に登れど阪路頗る嶮峻なれども僅に十八丁にして隼山に達すべし此路蒲生より西の瀧へ登るに比すれバ行程稍や近うして平易あり

隼山　坂手觀音

西の瀧に對し又東の瀧と稱せり海を抜くこと二百四十二間後に數十丈の高さに及べる斷岸絶壁頭を壓し南面を下瞰せど阿波の鳴門淡路嶋播广灘の波光睫眉の間に逼りて白帆の去來蛛船の西東に奔馳するさま實に神來の畫圖に似たり加ふるに境内櫻樹いと多くその光景また大に吟懷を迷はせり青春の頃は紅雲縹緲として遊客此地彼所に紙を曳き行厨を開くもの甚だ多し

本尊十一面觀世音は障壁を立てたる如き絶壁の下ある嵓窟乃裡に

鎮坐し巡島八十八ヶ所第三番の靈場にして保元元年六月七日海中より現出し給ひし尊体なり毎年六月十七日と大三十日にい鳴門沖より當山へ龍燈を捧げ点すと云ひ傳ふ

鐘楼の西に茶堂あり茗を喫して一憩すべし

大悲高閣倚屏顔。俯見嶂嶠連翠嶺。認得鳴門波浪穩。許多帆影飽風還。

小野寺鳳谷

翠巘登龍上。秦帆過岸根。觀音方得意。遙海對鳴門。

植田篁山

此幽境を辞すれば元と來し坂手路に歸るも可なり然れども洞雲山及ひ巷石山に遊はんとなれば隼山の山門を出て坂手路に下らず西に向ひ山腹の阪路を右に取り行くこと凡三丁許にして毘沙門に達す

洞雲山 毘沙門

巨巖一大洞窟を作つて墜道の狀をなし長さ凡ろ十餘間洞底毘沙門天を安置し前に天然の孔を有するも洞内冥蒙雲嵐愀々人をして戦慄せしむ洞門に扁額あり洞雲山と題す蔡恒善乃書あり洞門乃左手にも一大窟洞ありこの裡に靈泉湧をなして龍乃潜むかと疑はれ洞外亦老松古杉鬱蒼として幽邃寂寞畫尚は郭公を聞く

此境昔し靈泉寺とて本島第一乃巨刹ありしも曆應天正乃二兵燹に罹り終に廢せりと又或書に十河孫六郎存保仙石權兵衛秀久等一時此寺に根據したりと云へり靈泉寺乃遺蹟たる大師堂大日堂等之今尚ほ保存して香篆乃絶ゆることあし爰を巡島第一番ゝ靈場とす

仰看山欲墮。惱々心不情。一洞鑽崖腹。猶函蝕秋果。
玆中黑潭々。巖將長窟裹。廊側懸雲鍾。黝鋪青逆朶。
一杵搖萬壑。餘韻以矣裸。又有泌寒泉。陰窟測寶匣。
矮筱根半浸。垂滴飛珠顆。庭身攀廊巖。鯢魚又坎軻。
宿嵐排嫉鼻。鐘乳參差郭。俄然漏太陽。衣上飜烈火。
云祀多閑天。崟剤寶龕鎖。洞窮滑石聰。萬仞壘磯砢。
慷乎不可留。遮欄或傾墮。模索自穴出。轉覺脚酸跛。
始知蔡興善。扁榜不欺我。衣衫濕淋漓。半日雲中坐。

安政丁巳六月五日　秋村柴筆

百尺嶮蹬一路通。喬松乱立翠龍蔥。氣蘇神定多閑窟。

小野寺鳳谷

暮鐘聲冷日西銜。山霧蒼濛埋老杉。我欲一揮頑石室。
振衣千丈最高巖。

河野香村

同　在水翁上洞雲山

毘沙門より數十歩西北に方り巖上に一滝の瀧泉あり幅四尺長さ二丈餘にして日向れ瀧と云ふ

水　音　は　巖　の　下　や　閑　子　島

瀬　石

萬壑蒼々雲氣昏。激流斜落古松根。靈泉寺靜僧歸晩。
只見幽禽到洞門。

抱拙老人

日向の瀧より西の方更に五六十歩にして舊き菅廟ありしも今と廢せり此邊絶て雜樹なく唯老梅一株あり

雖捫峭壁種疎梅。菅相廟荒丹艦摧。萬壑千巖深雪底。
先將春色牢天來。

柴　秋村

洞雲山を辭し平易ある石逕を少しく西にたどり雜木岩石の間を縫ふて北すること三四丁にして碁石山に到るべし

碁石山　碁石ヶ瀧

峰巒牢天に屹立し其形容岩質恰も碁石に似たりと云ひ或ゐ昔し弘法大師乃棋を圍みし遺蹟なりとも云ふ西面なる巨巖危石の半腹を西北に迂廻せる鳳凰の翼を張りて聳立したるが如き嵩窟中に不動尊を祭る此處巡島第二番の禮場なり又其上なる偉異特絶の巖角に祠を設けて金刀比羅宮を鎮し近世また峯頭至險なるところ更に箸蔵祠を祀れりともに鉄索を捫して攀るを得べし此境直下を望まゞ頭腦眩惑して殆んと佇立するに堪へ難く近くゐ内海灣の景色千態万狀一々指點すべく遠くゐ讃東の碧螺を眺むるに妙にして殊に秋月山嶺に浮ふの景を最も絶佳とも

一嶼頹々一嶼欹。遠山如走近山追。淡雲細雨時々抹。
出沒變更奇更奇。

恭石山雨中眺望　　中澤雪城

空とれて巖にもむやけふの月　　辰年

恭石山を辞すれを苗羽路に下るを順序とす此路は前きに登りたる坂手路よりも稍や平坦にして山腹の松林を繞ふこと凡そ十四五丁にして苗羽村常光寺の裏手ゐ達すへし

此村と本島有數の富村ゐして特油醸造家最も多く近來土庄高松岡山等へ航する漁船も朝夕寄港せり又觀月樓と云へる茶店あり休泊するゐ適せり

常光寺乃裏路を海岸ゐ向ひて少しく西ゐ進まば土庄より坂手村ゐ通する縣道ゐ會すべし茲より坂手ゐ還るも亦寒霞溪ゐ往くも人々便利ゐ任すべしと雖も直ちゐ寒霞溪へ行かんゐは縣道を西北方ゐ進み鄕社八幡神社を鎭坐する龜甲山の裾路を通り行けと石橋あり其傍らに秋光樓とて清潔ゐして雅致ある料店あり一休すべし又路傍右手に鼻尾池の碑あり行くこと凡一丁ゐして更ゐ二つの石橋と渡り植松ゐかゝるなり

植松と枝朶の奇なる老松蕭々たる廣馬場ゐして春季は松蕭と產ゑ夏期と涼風徐々に來りて衣を拂ひ峨々たる峻嶺は遠く四邊を擁し內海灣の蒼海は近く眼前に横はり又濱邊には數丁の鹽田井然として艦烟高く碧天を衝き風光頗る佳なり彼の內海十二勝の一植松艦烟とは是なり此境の北に方り安田道にかゝる所に星ヶ城主飽浦信胤の碑あり宜しく一拜すべし

飽浦神社

信胤姓源氏。其元。住江州。而以佐々木爲氏。元曆元年。三郎左衛門盛綱。屬干將軍。欲伐平氏於備前兒島。則爲藤戸之先渡也。於此。恩賜於兒島郡。故子孫分所干兒嶋之飽浦。因謂佐々木三郎

左衛門他浦信胤。暦應三年。來干小豆嶋。而後卒。則葬此云。有故而記。安田村岡田利和

明和五戊子の年安田村に岡田喜内利和と云へる人あり或夜の夢に白髮の老翁顯れて云へらく我こゝは興國正平の頃當星ヶ城に居りし佐々木三郎左衛門他浦信胤なり我靈に當村の松原に葬らるゝと雖も未た碑さへも建る者なし願くは汝此邊へ我か爲めに一の廟を建て呉れよと懇々頼みをきて搔き消す如くにありしと見へ夢は忽ち覺め果てたり喜内其夜の事とさして心にも留めさりしに次の夜また同し夢を見たりしゆへげに不思議なる事のあるもの哉と思ひ居る處に其次の夜もまた〳〵等しき夢を見たりける玆に於て喜内いよ〳〵不思議に堪へやらす此事を昵懇なる人々に語りけるに是れこゝ世に所謂靈夢なるものあれ急き祠を建てゝ其靈魂を祀るへしとて爰に喜内これが發企となり早速其夢に見し植松なる松原の北端に地を相して其年の六月二十五日漸やく其工事を竣へにけれと明くる日此処に信胤乃靈を祀りて他浦神社と崇め奉り二十七日盛ある祭典をを擧けしとあり碑文に故ありて而して記すとは斯る事をさしたるなるべし

植松より西北に通する縣道を行きて石橋を渡り進めを木ノ庄片城なと云へる所の濱邊に塩田許多見へなは行くはどに安田木ノ庄等より片城に入る路と會せり此處より西すること十餘間にして右手に行く路あり極樂寺田尾とて寺院の傍らを經て寒霞溪へ往くべき捷徑あれども案内者なけれを迷ひやすし腕車にて馳せんにハ左手なる縣道則ち下村街道を行き玆より七八丁にして楊柳橋を渡り西すること壹丁許にして右手に曲り寒霞溪新車道に入るをよしとす

○大部浦　寒霞溪四望頂まて凡六十丁

大部浦は寒霞溪乃背面にして西北と備淨播灘に接し常に汽船の便なきも備播の游客和船にて此浦に航路を取るもの多しこの境果物の栽

培盛にして就中桃李夥しく彼の二月の花候には一堤紅雲を以て埋没し或處は濃く或處は淡く濃きものゝ盛裝したる美人のごとく淡きものは退隠したる高士のごとしまた海岸より西北を遠望すれば雲烟渺茫の間に大嶋中の島犬島は蜃の如くに浮みその附近に許多の白帆漁舟往還して恰も閑鷗の游泳するが如く風光一の趣きあり

蓬窓夢破客心孤。月落寒潮白漫糊。漁笛聲中驚水鳥。
霜凝蛭際幾叢芦。

自赤城航小豆嶋舟中　　鎌寒士

此浦に上陸して寒霞溪へ行かんにゝ桂川に沿ひ觀音精舍を右手より碧嶽を左手に見つゝ進まゞ路傍の溪流苔石に激して珠玉迸り鹿背は蜿蜒高く低く波瀾の狀をなして野廉を徑ぎ坂路崎嶇いよ〳〵登れゞ愈よ險にして巨松老杉蒼鬱を罩めて晝猶ほ晦冥たり此間をくゞり往くこと凡一里にして萬丈の白蛇九天より落ち來るの觀忽ち眼に映ずべし

仙崖瀧

巨岩層々蔽ひ重なり其高さ一丁餘に及ぶところ溪流こゝに奔逸して絶壁の一角に觸るれゞ激怒更に加はり落ては激し激しては落ち飛沫霧を撒らし雨を降らし其さま落花の如く或は白雪の如く又珠玉の簾を垂れたるがごとく壯又壯殆んと譬ふるに物なし山靈倒し此瀧を移して寒霞溪の巖角に懸けたらんには山水相待て照應し絶勝のもと更に一大奇觀を添ゆべきに之を風致乏しき山中に現出せしむるは果して何の意あるによるか

仙蛭瀧より隣ること數丁にして阪路羊腸乃如く險又險を加へ竹筇の扶けを藉るにあらざれゞ甚だ攀ぢかたし夫れより四望頂に近づくまへ凡十丁許の間細逕に敷くに庭園に用ゆる飛石の如き坦石の或は小或は大あるも乃疊々羅列したるあり又此邊雜草矮樹閉ぢこめて逕を蔽ひ骨を沒するも山嶺に近つくに順ひ漸やく平易の路となり彼の黄草原頂に出て四望頂芭蕉碑畔に達するを得べし

寒霞溪道ゑる履畢

○寒霞溪土産品

一錦溪集　は一に寒霞溪記勝と題するものにして古來溪山に遊べる文士墨客の詩文を編纂して小冊子となせるものなり第一集既に剞す二編三編陸續發行せんとす登山の雅客希くハ原料を寄贈せられん事を

一寒霞溪十二勝　と浪華乃畫史長坂蟹在の摸寫したる寒霞溪十二景の眞圖を優雅なる小冊子に編したるもノなり

一神懸山眞景圖　ハ保勝會より發行したる石版一枚摺の美麗ある十二景乃眞圖なり

一寒霞溪道ゑるゑ　と小豆島に渡海すべき四航路乃海里本嶋乃全地圖并に土庄港坂手港内海灣大部浦の四着点より溪山に到る間ハ里程旅舍古蹟名所詩文俳歌乃至寒霞溪乃歷史等を詳記し終りに十二景の他奇勝靈區乃名稱由來を說明したる遊山ハ東道師なり

一寒霞溪寫眞帖　は十二勝を撮影せしもノあり或ハ全景を撮寫せし

ものありて草壁村長町貫十郎氏乃發賣するもの乃最も雅致あり

一寒霞溪樂燒　之所謂讃陽道八乃流派と平賀源内の餘流を折衷して一機軸を出したる高松に隱士久保祖舜なる陶技師乃製作なり天保年間寒霞溪に麓にて一種乃陶土を發見し樂燒を造りて道樂となせし雅人ありしも其後之を娛しむに人絶てなかりしが去る明治三十二年我保勝會に於て祖舜師を招聘し寒霞溪山下に陶土を以て試に樂燒を製せしめしに最も優尚なして韻致ある陶器を得たり於茲乎溪山に遊ふの文人雅客相競て之を購求し遊山の土宜とすること、はなりぬ蓋し寒霞溪燒の妙味特色とも云ふべきは其燒揚りの變色にあり則ち青銅色に變するあり或は赤銅色に化するあり或は漆黑色を現はすあり或は紫雲色を呈するものありて千變萬化一として同色のものなし是れ則ち茶客韻士の清評を博せし所以なり染着の模樣等は專ら寒霞溪の眞景に詩文俳歌を題し若くは楓葉を畫きたるもの多しとするも又雅客の需めに應して各自の詩歌俳畫を染着することを得べくまた神懸山保勝會會員に限り特に定價乃三割を低うして販呈すべしと

一寒霞溪十二景糖　は高松市丸龜町龜玉堂の發賣するものにして最に第四回内國勸業博覽會に出品し添くも宮内省より御買上の榮を賜はりたる菓子なり

一寒霞溪案内菓子　は下村なる風月堂より發賣せるものにして其名の如く聊か探勝家の便をも計らんとしたるものなり

69
141

明治三十三年十一月二十二日印刷
同　年十一月二十八日發行

定價金拾八錢

著作者　香川縣小豆郡草壁村大字上村百壹番戸　中桐絢海

發行兼印刷者　同縣同郡苗羽村大字苗羽拾七番戸　池田武次郎

印刷所　同縣同郡同村大字同所　小豆嶋紀念音樂會印刷部

Ex 9
111

Ⓜ

026059-000-5

69-141

寒霞渓道しるべ

中桐 絢海／著

M33

ADC-3712

震溪道志卷全

69
141
Ⓜ